

今週の本棚：富山太佳夫・評 『ダイヤモンド・ドッグ…』／『老首長の国』

◇『ダイヤモンド・ドッグー《多文化を映す》現代オーストラリア短編小説集』＝ケイト・ダリアン＝スミス、有満保江・編

(現代企画室・2520円)

◇『老首長の国』＝ドリス・レッシング著

(作品社・3990円)

◇多民族、多文化の状況が生み出す文学



よけいな解説や耳障りな応援は聞きたくない。テレビの音を消してオリンピックを見る。そうすると奇妙に注意が集中して、いろいろなことが、思いがけずによく見えてくる。選手の緊張した表情や体の動きも。とくに、競技をおえたあとの選手が見せる複雑な……何か。

日本や中国の選手を見ているときには何の異和感もないのだが、他の地域の選手になると、国旗が気になる。肌の色が気になる。大抵の場合、国名と肌の色はこちらの予備知識と一致するものの、そうでないことも。オリンピックのために本人が国籍を移したのだろうか、それとも移民の何代目かなのだろうか。

それに、どんな言葉を話すのだろうか。ジャマイカの選手がインタビューに英語で答える——なぜ、イギリスからは遠い西インド諸島の選手が英語で？ 今や英語がグローバルな言語だから？ もちろん私はその理由を知っている。知っているからこそ、私にとっては、オリンピックがスポーツの祭典につきるものではなくてしまうのだ。

「夫婦は面倒から逃れたくてこの島に移住してきた。ところが、夫婦の十代の娘には、島が両親を乗せて漂う幽霊船みたいに思えてきた」。ふだんならば短編小説の一節として読みすごしてしまうような部分が、まったく無縁のはずの北京オリンピックのせいなのか、意識のどこかに残ってしまう。「中国人の一家が隣の家に引っ越してきた」。

「道には迷いこなかった。オーストラリアの田舎の風景を眺めながら、このすてきな、整備の行き届いた新しい道路を行けばいいだけだ……赤カンガルーが一頭、ハイウェイの真ん中を、彼らのほうに向かって跳ねて来る。白いラインからはずれることなく、何かに憑(と)りつかれたかのように、ひたすら跳ねてやって来る。ラインの切れ目を三つか四つずつ、力強い爪先(つまさき)で規則正しく蹴(け)りつけながら、やって来る。……彼女はハイヒールの爪先をつかんで、カンガルーを死ぬまで殴りつけた」。そんな文章にもぶつかる。

異なる国から来た、人種の異なる人々の融和の物語のかたわらに、こんな物語をおかざるを得ない国オーストラリア。別の短編では、一九五〇年の夏、「初めて顔を合わせたときには、全員がオーストラリアに移住してきたばかりの難民だった」。どこから移住してきたのかと言えば、「つい五年前、レニア・ベンスキーはアウシュビッツに、ゲニア・ジャノバーはベルゲン・ベルゼンに収容されていた」。そんな彼らに対して、みずからも十年前に移民してきた女性の口にする台詞(せりふ)、「最近のユダヤ難民のせいでオーストラリア人は反ユダヤ主義者になってしまいましたわ」。

日本人の多くがおそらく、美しい大自然の残る格好の旅行先と思い込んでしまっているオーストラリアは、西欧とアジアからの移民と、在来の住民(アボリジニ)によって構成される多民族、多文化の国家である。一六の短編は

そのことを鮮烈に伝える。現代の世界が抱える問題に最も鋭い、かつ極端なかたちで取り組むことを余儀なくされた文学がそこから出てくるのも当然のことかもしれない。

もちろん作家たちの出自もバラバラだ。パプアニューギニアを舞台として、旧日本軍にまつわる物語「アリガト」を書いた作家は、一九四六年、シドニーの生まれ。中国の湖北省生まれの作家もいるし、フィリピン生まれの作家もいる。母は先住民、父はベルギー人という作家も。ひるがえって、オーストラリアのオリンピック選手団はこのような多民族性をどこまで代弁しているのだろうか――もちろん記録の問題はあるにしても、そのことを承知の上で、考えてしまう。

どの種目だったろう、ジンバブエの選手の姿が一瞬画面をよぎった。この国の今の政情のことを考えると、この選手は祖国ではどのような位置にあるのだろうかと考えてしまう。ジンバブエ、旧ローデシア。かつてこの国を蹂躙(じゅうりん)したのもイギリスだった。

去年ノーベル文学賞を受賞したドリス・レスリングの短編集『老首長の国』の舞台は、かつて彼女自身が暮らしたローデシアに置かれている。彼女が眼(め)にし、作品に書き込むのは、融和自体が困難をきわめる多民族社会ではなく、イギリス人という白人と現地の黒人が向いあう社会である。現地の人々の土地を奪い、彼らを酷使しながらも、決してそこに安住できない白人社会の姿だ。ときには酷使されながらも白人たちを出し抜いてしまう黒人たちの、武骨なほどのユーモアだ。そしてアフリカの壮大な自然。これもひとつの書き方かと納得するしかないのかもしれない。(『老首長の国』は青柳伸子・訳)

毎日新聞 2008年8月24日 東京朝刊

[今週の本棚](#) [アーカイブ一覧](#)